



時の旅人 *A Traveller in Time* (1939)
アリスン・アトリー
(小野章訳) 評論社
(1/30刊・¥1300)

今年も残り少なくなった今ごろになって、一月に出た本を取り上げるというのも、少々気が引けるが、やり残した秀作の落穂拾いと考えていただきたい。本書は、意識のタイム・トラベルを扱った佳品である。

イギリスの片田舎、ダービシャーにある、サッカーズ荘園に、主人公の少女と兄弟たちが訪れる。そこで、主人公ピネロビーは、不思議な幻を見た。それは、遠い昔、この家に住んでいた人々の姿だった。いつの間にか、彼女は十六世紀の昔に還っているのだ……。

エリザベス一世の時代、幽閉された悲劇の王女メアリーと、王女に魅かれ、助け出そうとするバピントン家の一族とが、三百年の間、ほとんど変化のないサッカーズの光景として描き出されている。主人公は、現在の時と、過去の時とを、何度も往き来しながら、その二つの「時」を同時に生きていく。

十代の読者向きに書かれた作品である。その分、世界観の広がりには欠けるきらいはある。けれども、人物の鮮やかな性格描写に、少女の成長の幻影がからめられ、見事な効果を上げている。大人が読んでも、損のない内容だろう。